

設問番号	I (1)
解答又は 解答例	交互作用が有意である場合、一方の独立変数の効果が、もう一方の独立変数の水準によって異なることを意味する。この場合、主効果として得られた結果は、他方の要因の水準を平均した効果にすぎず、すべての条件に一樣に当てはまる効果であるとは限らない。そのため、交互作用が存在する状況で主効果のみを解釈すると、特定の条件における実際の効果を誤って解釈する可能性がある。このような場合には、単純主効果などを検討し、各条件における要因の効果を個別に解釈する必要がある。
出題の意図	本設問は、心理学研究における実験デザインとデータ分析、特に 2 要因分散分析の結果を正しく読み解く能力を問うものです。具体的には、交互作用と主効果の論理的関係を理解した上で、なぜ主効果の解釈に注意が必要になるのかという説明を求めています。これにより、受験者が分散分析の結果を表面的な有意性の有無だけで判断するのではなく、単純主効果の分析などの追加的な検討を通じて、データが示す現象を正確かつ慎重に解釈する能力を備えているかどうかを評価しています。

設問番号	I (2)
解答又は 解答例	(ア) 多重共線性 (イ) VIF などの指標を確認し、以下のような対応を行うことが考えられる。 説明変数の削除：相関の強い説明変数の組のうち、理論的重要性や先行研究の知見をふまえて一方を分析から除外する。 変数の統合・合成：相関の強い複数の説明変数を、主成分分析や因子分析などによって少数の合成変数に縮約し、それを説明変数として用いる。
出題の意図	本設問は、重回帰分析という心理学研究で頻用される多変量解析手法を実際に運用する際に直面しうる典型的な問題点（多重共線性）について、その発生を事前に見抜き、適切な対処法を選択・実行できるかという、統計的分析の実践力を総合的に評価することを目的としています。

設問番号	I (3)
解答又は 解答例	(ア) 本研究は新療法群のみに介入を行い、「療法なし群」は無処置の統制群であるため、両群の差が新療法そのものの効果によるものか、それ以外の要因によるものかを区別できない。新療法以外の要因としては、プラセボ効果が考えられる。すなわち、「治療を受けている」という意識自体が、症状の改善への期待感や安心感などを高め、主観的な症状評価を改善させた可能性がある。 (イ) 介入を行う研究者自身が効果の測定・評価も行くと、実験者効果（期待効果）や観察者バイアスが生じる可能性がある。すなわち、研究者が「自分の開発した療法は有効であってほしい」という意図を持つことで、無意識に参加者へ期待を伝えたり、評価の際に改善の兆候を過大に評価したりしてしまうリスクがある。 上記のような歪みを防ぐための手続き上の工夫としては、以下が挙げられる。 標準化された客観的評価尺度の使用：構造化面接や標準化された症状の評価尺度など

	を用い、評価者の主観的判断が介入しにくい手続きを採用する。 評価者間信頼性の確認：複数の評価者による評価の一致度を算出し、評価の客観性を担保する。 以上に加え、症状の評価・測定を、治療条件（新療法群か療法なし群か）を知らない第三者（介入に関与しない独立した評価者）に行わせる評価者の盲検の方法なども考えられる。
出題の意図	本設問は、心理学研究の交絡要因を具体的な事例から特定し、さらに研究者自身のバイアスという方法論上の問題とその統制方法までを一貫して理解しているかを問うものです。 (ア)では、プラセボ効果など治療技法そのものの以外の要因が結果に混入しうることを具体的に説明できるかを評価しています。 (イ)では、研究者自身が持つ期待や仮説が、介入だけでなく測定・評価の段階にも無意識に影響しうるという実験者バイアス（評価者バイアス）の問題、およびそれを統制するための盲検化・標準化評価・独立評価者の活用といった具体的な手続き上の工夫を説明させることで、研究を実際に計画・実施する際に求められる方法論的厳密さについての理解を評価しています。

設問番号	I (4)
解答又は 解答例	(ア) 本実験では、単語呈示中に参加者自身が判断を行い、判断が終わり次第、自らキーを押して次の単語に進む手続きが採用されている。そのため、条件 A の判断は、自分自身の記憶やエピソードを想起する必要があるため、条件 B の判断よりも判断に要する時間が長くなりやすい。この結果、条件 A では各単語に対する呈示（接触）時間が条件 B よりも結果的に長くなっていた可能性があり、記憶成績の差が「判断内容（処理の深さ）の違い」によるものなのか、それとも単に「単語に接触していた時間（学習時間）の長さ」の違いによるものなのかを区別できない。 (イ) 判断内容（処理の深さ）以外の要因の交絡を排除するためには、以下のような手続き上の工夫が考えられる。 呈示時間の統制：参加者の自己ペースに任せるのではなく、各単語の呈示時間をあらかじめ両条件で同一の時間（固定時間）に統制し、判断が終わっていても一定時間で次の単語に自動的に切り替わるようにする。 反応時間の記録と統計的統制：やむを得ず自己ペースを採用する場合には、各単語に対する判断の反応時間（RT）を記録し、条件間で RT に差がないかを確認する。差がある場合には、RT を共変量として分析に投入（例：ANCOVA）し、学習時間の影響を統制した上で条件間の記憶成績を比較する
出題の意図	本設問は、処理水準説を題材に、具体的な実験手続きから剰余変数の統制について批判的に検討する力を評価するものです。「自己ペースで学習を進める」という手続きに着目し、独立変数である「判断内容」の操作の中に、意図せず「学習時間」という別の要因が交絡している可能性を見抜けるかがポイントとなります。さらに(イ)で

	は、問題点の指摘にとどまらず、呈示時間の統制、反応時間の記録と統計的統制といった、具体的かつ実行可能な改善策を提案できるかを評価しています。
--	--

設問番号	Ⅱ（１）
解答又は 解答例	職場集団の発達について、Tuckman（1965）は、集団が形成されてから安定的に機能するようになるまでの過程を、形成期（Forming）、騒乱期（Storming）、規範期（Norming）、遂行期（Performing）の４段階として示している。 形成期では、メンバーは不安や緊張を感じながら互いの様子を探り、情報交換や自己開示を始める。役割や活動の進め方もまだ明確ではなく、リーダーの指示に従って行動することが多い。例えば、新しく編成されたチームでは、互いの考え方や仕事の進め方を確認しながら活動を始める。 騒乱期では、メンバー間で意見の食い違いや葛藤が生じ、リーダーへの批判や不満が表れることもある。例えば、仕事の進め方や役割分担をめぐる意見が対立することがある。 規範期では、役割や課題についての曖昧さが減り、集団の規範が形成される。集団の凝集性や「我々意識」も高まり、メンバー間の信頼や協力が進む。例えば、役割分担や意思決定の仕方について共通理解ができ、互いに協力しやすくなる。 遂行期では、メンバーが協調しながら、集団の課題遂行や目標達成に向けて建設的に活動する。例えば、問題が生じても必要に応じて役割を調整しながら、協力して解決に取り組むことができる。 このように、集団はメンバー間の相互作用を通して、時間の経過とともにダイナミックに変化していく。その過程では、騒乱期にみられるような意見の食い違いや葛藤が生じることがあり、それらをどのように調整していくかが、その後の規範形成や課題遂行のあり方に関わる。
出題の意図	本設問は、集団の発達過程についての理解を問うものです。メンバー間の関係や役割、規範、課題遂行のあり方が時間の経過とともに変化するという集団のダイナミクスを、職場における具体的な現象と結び付けて説明できるかを評価しています。なお、必ずしも Tuckman（1965）のモデルに沿った説明でなくても、集団が形成されてから安定的に機能するまでの変化を、発達段階やその特徴に即して適切に説明できている場合には評価します。

設問番号	Ⅱ（２）
解答又は 解答例	利用可能性ヒューリスティックとは、ある出来事の頻度や生起確率などについて、その出来事に関連する事例や情報がどの程度容易に思いつくかという利用可能性に基づいて判断する傾向である。最近接した出来事や身近な出来事、印象の強い出来事などは思いつきやすいため、実際の頻度や確率とは異なる判断につながることもある。 日常生活の例：身近な人が相次いでインフルエンザにかかったことから、「今年は非常に流行している」と判断する、など。最近の出来事であることや、身近な人に関わ

	る出来事であることによって生じやすい。 社会判断の例：凶悪事件が繰り返し大きく報道されたことから、「治安が悪化している」と判断する、など。強い印象を与える出来事であることや、メディアを通じて繰り返し接することによって生じやすい。 リスク判断の例：飛行機事故が大きく報道された直後に、飛行機事故の危険性を実際以上に高く見積もる、など。重大で印象に残りやすい出来事であることや、報道直後で関連する事例が思いつきやすいことによって生じやすい。 このように、出来事に最近接したこと、身近さ、印象の強さ、反復などによって関連する情報が想起されやすくなり、その利用可能性の高さが頻度や確率の判断に影響する。
出題の意図	本設問は、判断や意思決定に関する利用可能性ヒューリスティックについて、その基本的な仕組みを理解し、具体的な場面に適用して説明する能力を問うものです。単に概念の定義を説明するだけではなく、日常生活、社会判断、リスク判断など異なる領域の具体例を挙げ、それぞれについて、出来事が最近生じたものであること、印象の強さ、反復、身近さなど、事例を想起しやすくする条件を説明することを求めています。これにより、受験者が利用可能性ヒューリスティックの概念を具体的な判断現象と関連づけて理解しているかどうかを評価しています。

設問番号	Ⅱ（3）
解答又は 解答例	脳の発達に伴って、神経細胞どうしをつなぐシナプスも変化していく。発達の初期には多くのシナプスが形成され、その後、神経活動や経験に応じて、一部のシナプス結合は維持・強化される一方、一部はシナプスの刈り込みによって減少し、神経回路が発達・再編されていく。 例えば、母語の獲得では、乳児は発達の早い時期には、母語に含まれないものも含めて、さまざまな言語音の違いを聞き分けることができる。しかし、日常的に母語を聞く経験を重ねるうちに、母語で使われる音の違いには敏感になる一方で、母語では区別されない音の違いは聞き分けにくくなっていく。このような知覚の変化は、言語経験に応じて、言語音の知覚や処理が母語に適した方向へ特殊化していく現象の一例である。 また、シナプスの形成や刈り込みが進む時期は脳の部位によって異なり、比較的早い時期に変化が進む領域もあれば、青年期まで変化が続く領域もある。このように、脳の発達には、神経活動や周囲の環境から受ける経験も関わっている。
出題の意図	本設問は、脳の発達に伴うシナプスの形成・維持・強化と刈り込みについての理解を問うものです。シナプス結合が神経活動や経験と関わりながら変化し、神経回路が発達していく過程を理解した上で、母語の獲得や視覚機能の発達などの現象と結び付けて説明できるかを評価しています。

設問番号	Ⅱ（4）
------	------

解答又は 解答例	目標管理制度では、期の初めに上司と部下が話し合って仕事上の目標を設定し、その達成に向けた行動計画を立て、一定期間後に目標の達成度を評価する。 目標管理制度がワークモチベーションを高め得る理由は、目標設定理論によって説明することができる。Locke & Latham（1984）は、具体的で困難な目標を設定することがモチベーションを高め、成果の向上につながることを示している。明確な目標が設定されると、何に注意を向け、どの程度努力すべきかが明らかになり、努力の持続や目標達成のための方略の形成が促される。また、現在の自分の状態と目標とする状態との差を把握しやすくなり、その差を縮めるための行動にもつながる。 例えば、現在 70 点程度である社内の技能試験について、上司との話し合いによって「半年後までに 85 点以上を取得する」という目標を設定した場合、現在の状態と目標とのギャップが明確になり、必要な知識の学習や苦手分野の重点的な練習など、目標達成に向けた行動が促される。 また、ハイパフォーマンス・サイクルモデルでは、目標へのコミットメントや自己効力感、フィードバックなども、目標達成に向けた取り組みに関わると考える。行動の結果や成果についてフィードバックを得ることで、目標との差や改善すべき点を把握し、必要に応じて行動や方略を修正することができる。さらに、成果が本人にとって価値のある結果につながれば満足感が高まり、それが次の目標への取り組みを支えることもある。十分な成果が得られなかった場合にも、フィードバックを次の取り組みに生かすことができる。 このように、目標管理制度は、目標の設定とその達成に向けた一連の過程を通して、従業員のワークモチベーションを高め得る。
出題の意図	本設問は、目標管理制度がワークモチベーションを高め得る仕組みについて、動機づけに関する心理学理論と実際の職場場面とを関連づけて理解できているかを評価するものです。目標設定理論やハイパフォーマンス・サイクルモデルなどを踏まえ、目標の明確さや難易度、目標へのコミットメント、自己効力感、フィードバックなどが、目標達成に向けた行動やその後の取り組みにどのように関わるのかを説明できるかを評価しています。